② 優良な種畜の確保
純粋種の減少及び種畜不足が危惧されており、優良種畜等を確保・供給する体制の強化が重要である。
③ 人工授精技術の向上・普及
効率的な改良・増殖を進めるため、凍結精液の利用を含む人工授精技術の向上・普及による優良種畜の広域的な利用を図るものとする。
④ 繁殖技術の推進
季節外繁殖技術等の推進により、ラム肉の周年出荷及び生産性の向上を図るものとする。
⑤ 飼養管理技術及び衛生管理技術の向上
飼養管理技術及び衛生管理技術の向上を図り、子羊の損耗防止等により生産性の向上に努めるものとする。

2 増殖目標
羊肉等の利用を推進するとともに需要動向に応じた頭数となるよう努めるものとする。なお、畜産物利用を推進するとともに、高い放牧適性を活かして耕作放棄地の有効活用や景観保全への活用、小型で扱いやすい特性を活かしてふれあいによる安らぎや癒やし効果の発揮や教育への活用、地域特産品づくり等の多様な利活用も重要である。

（参考）めん羊をめぐる情勢
我が国のめん羊飼養の目的は毛用から毛肉兼用、肉用と変遷し、さらに近年は耕作放棄地への放牧による鳥獣被害等の予防、ふれあい体験、放牧による景観維持（観光）等多面的利用についても注目されてきている。また、少頭飼いから多頭飼いになり、近年大規模な専業農家も出てきている。繁殖用成畜の飼養頭数は、約１万頭（平成20年）であり、羊肉需要としては年間2.3万トン（平成19年）であるが、そのうち国内生産量は約100トンと全体需要の約0.5%である。

Ⅶ 山羊
1 改良目標
⑴ 改良事業の概要
山羊の改良は、昭和10年代から30年代までに乳用の利用を目的としてザーネン種の種畜導入が図られ、国（現独立行政法人家畜改良センター）及び都道府県において行われた研究、系統造成、種山羊の民間への配布により、泌乳能力等の改良及び繁殖技術の開発が図られ、日本ザーネン種が作出された。昭和40年代後半以降は、国（現独立行政法人家畜改良センター）を中心に種畜の配布が継続的に行われ、昭和59年からは、凍結精液の作成・配布も行われている。
⑵ 改良の現状
乳用種である日本ザーネン種を中心として、泌乳能力の向上が図られている。また、肉利用における大型化を目的として、在来種と日本ザーネン種、ボア種等の交雑利用も行われている。
⑶ 能力に関する改良目標
繁殖能力の向上に努めるとともに、粗飼料利用性が高い等の特長を活かした山羊の生産に努める。また、斉一化に重点をおき、安定した生産体制の整備及び生産コストの低減を図る。
加えて、乳用にあっては山羊乳・乳製品販売等の需要に応えるために泌乳能力の向上に努めるとともに、肉用にあっては産肉性の向上に努める。
① 繁殖能力
受胎率、産子数、ほ育能力等の向上に努めるものとする。
② 泌乳能力
乳用にあっては、乳量の向上に努めるものとする。
能力に関する目標数値

	総乳量（250日換算）
現　在	433kg
目　標（平成32年度）	600kg

注：日本ザーネン種のものである。
③ 産肉能力
肉用にあっては、発育性、増体性及び枝肉歩留まりの向上に努めるものとする。
⑷ 体型に関する改良目標
① 強健で肢蹄が強く体積に富み、体各部の均称がとれ、飼養管理が容易な体型とする。
② 乳用にあっては、乳器に優れ、搾乳が容易な体型への改良が重要である。
⑸ その他家畜能力向上に資する取組
① 改良手法
近親交配の回避と間性（注）等の不良形質の排除のため計画交配に努めるものとする。
② 優良な種畜の確保
純粋種の減少及び種畜不足が危惧されており、優良種畜等を確保・供給する体制の強化が重要である。
③ 人工授精技術の普及・活用
効率的な改良・増殖を進めるため、凍結精液利用を含む人工授精技術の普及・活用による優良種畜の広域的な利用を図るものとする。
④ 繁殖技術の推進
季節外繁殖技術の開発等を推進するとともに、周年繁殖性の遺伝的解明を図ること等により、山羊乳の周年安定供給を図るものとする。
⑤ 飼養管理技術及び衛生管理技術の向上
飼養管理技術及び衛生管理技術の向上を図り、子山羊の損耗防止等による生産性の向上に努めるものとする。
注：間性
遺伝的には雌であるにもかかわらず雌雄の特性を併せ持ち、繁殖能力のないものをいう。間性を発現する遺伝子と無角の遺伝子は関連が深いことが知られており、無角の個体同士を交配させる場合のみ間性が生じるので、このような交配を避けることにより間性の発現を避けることができる。

2 増殖目標
乳用、肉用それぞれの利用を促進するとともに需要動向に応じた頭数になるように努めるものとする。なお、畜産物利用を推進するとともに、高い放牧適性を活かして耕作放棄地の有効活用や景観保全への活用、小型で扱いやすい特性を活かしたふれあいによる安らぎや癒やし効果の発揮、地域特産品づくり等の多様な利活用も重要である。

（参考）山羊をめぐる情勢
我が国の山羊飼養は、自家消費の乳用として１、２頭飼いが主流であったものが、近年は生乳・乳製品販売のために多頭飼いし商業的に取り扱う農家も出てきている。山羊乳については、その機能性（低アレルギー、高タウリン等）により注目が高まり、近年、機能性の研究開発が行われている。繁殖用成畜の飼養頭数は約1.5万頭（平成20年）である。山羊肉については、年間約250トン（平成19年）の需要があるが、そのうち国内生産は約54トンと全体需要の約20%である。

鶏の改良増殖目標の公表について

平成32年度を目標年度とする鶏の改良増殖目標を次のとおり定めたので公表する。

平成22年7月27日　　農林水産大臣　山田　正彦

鶏の改良増殖目標

Ⅰ まえがき
食料は、人間の生命の維持に欠くことができないものであり、かつ、健康で充実した生活の基礎として重要なものである。中でも鶏肉・鶏卵はたんぱく質に富み、国民の健康増進に大きく貢献しており、将来にわたって、良質な鶏肉・鶏卵が合理的な価格で安定的に供給されなければならない。特に鶏卵は、生産者の努力等により小売価格がほとんど変わっていないため、「物価の優等生」と言われている。